８．イスラムと経済

- １．金儲けに肯定的なイスラム
- ２．宗教に埋め込まれた経済
- ３．イスラムにおける所有観念
- ４．イスラム世界の経済は流通経済
- ５．「市場」（バーザール、スーク）イスラムの経済空間

1．金儲けに肯定的なイスラム

コーラン

- コーランを読誦し、礼拝の務めをよく守り、神から授かった財産を惜しみなく使う人々は、絶対にはずれっこない商売を狙っているようなもの。（35章26節）
- 神の御導きを売り飛ばして迷妄を買い込んだ人々、だが、かれらもこの商売では損をした。目算どおりにいかなかった。（2章15節）

スンナ

- 誠実で信用のおける商人は（最後の審判の日に）、預言者、義人、殉教者たちとともにあるだろう。
- 信用のおける商人は、最後の審判の日に、神の玉座の影にすわるだろう。
- 商人たちは、この世の先供、地上での神の忠実な管財人である。

２．宗教に埋め込まれた経済
イスラム経済の基本構造

『コーラン』第２章

- 天にあるもの、地にあるものすべてはアッラーに属す。汝らが心のうちをさらけ出そうとも、包み隠そうとも、アッラーは汝らとその決済をつけ給う。誰を赦し、誰を罰し給うかはすべて御心のまま。アッラーは全能におわします。

- 近代経済学は、「経済人」から出発するのに対して、イスラム経済は「神」から出発する。
- イスラムの経済活動・制度・システムのすべては、信徒共同体でもあり神の共同体でもあるウンマにおける正義・公正（アドル）とマスラハ（公共の利益）と結びつけられている。
- また、ウンマの指導者は、マスラハを目的とする限りにおいて、この個人による生産物に対して、課税と徴税の権利をもつ。

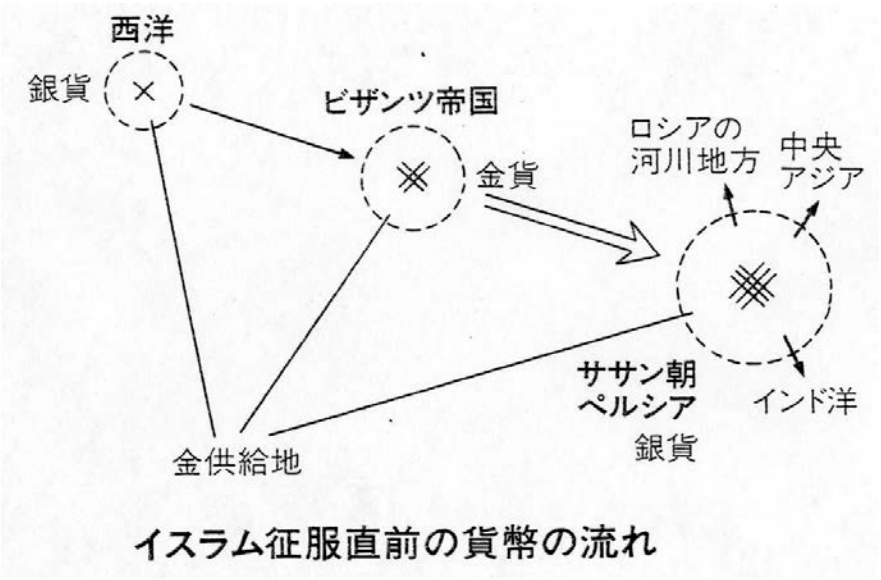
３．イスラムにおける所有観念①

- イスラム経済の根底にある考え方は、所有権の規定に端的に表れている。人から出発する近代経済学において、生産手段の個人所有は経済を支える根本概念と考えられている。これに対して、神から出発するイスラム経済にあっては、資本であれ労働であれ、生産手段のすべては神の所有のもとにある。
- また、生産手段を使って生産される財も、それが資本財であれ消費財であれ、すべて神の所有のもとにある。それらは、迂回生産過程をたどれば、結局のところ、天然資源に労働を付加することによって得られた生産物だからである。
- 個人は、それを労働によって利用し、そこから果実としての生産物を得る限りにおいて、天然資源を排他的に占有する権利を与えられる。つまり、経済活動による利益は、付加された労働との関係のみで規定される。
- そこから、不労所得としてのリバー（利子）の禁止も生じる。
- 貯蓄を嫌い、資金の流動化を、結果として促す。

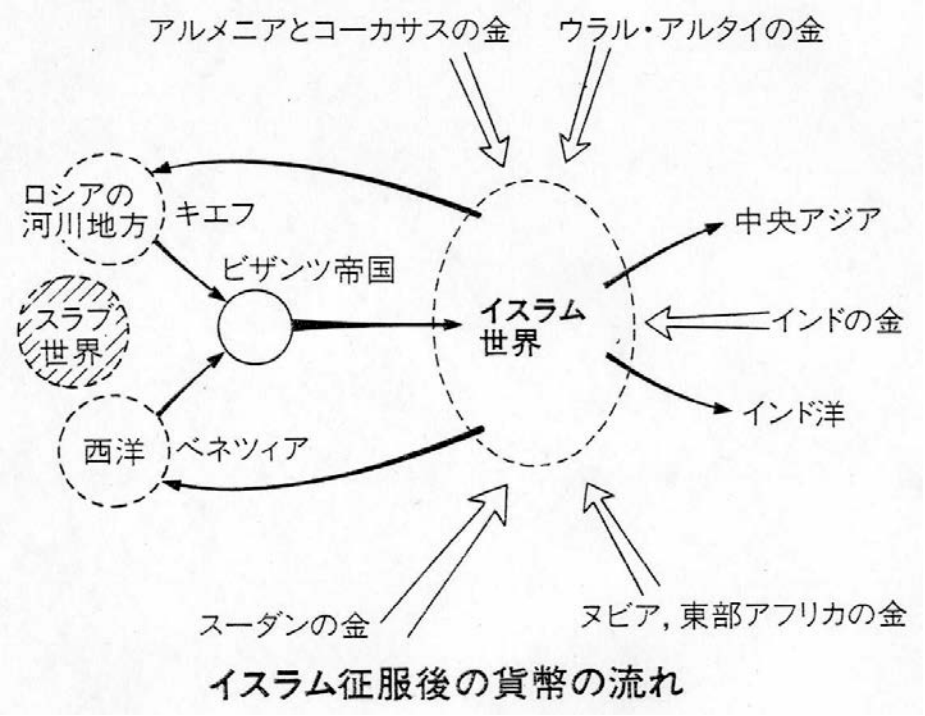
⇒ 商人の経済・投資の経済

4. イスラム世界の経済は流通経済

貴金属貨幣流通圏



イスラム征服直前の貨幣の流れ

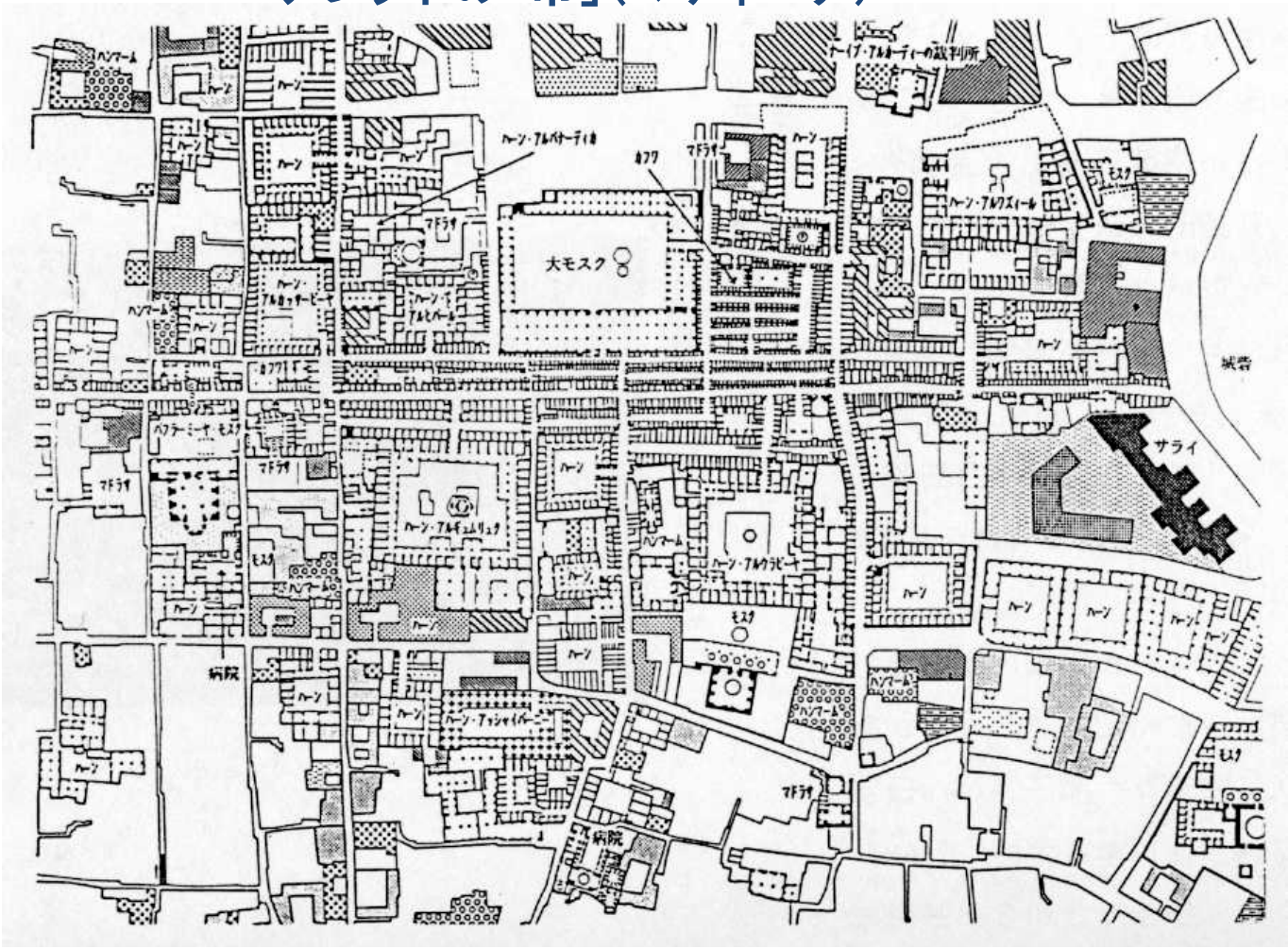


イスラム征服後の貨幣の流れ

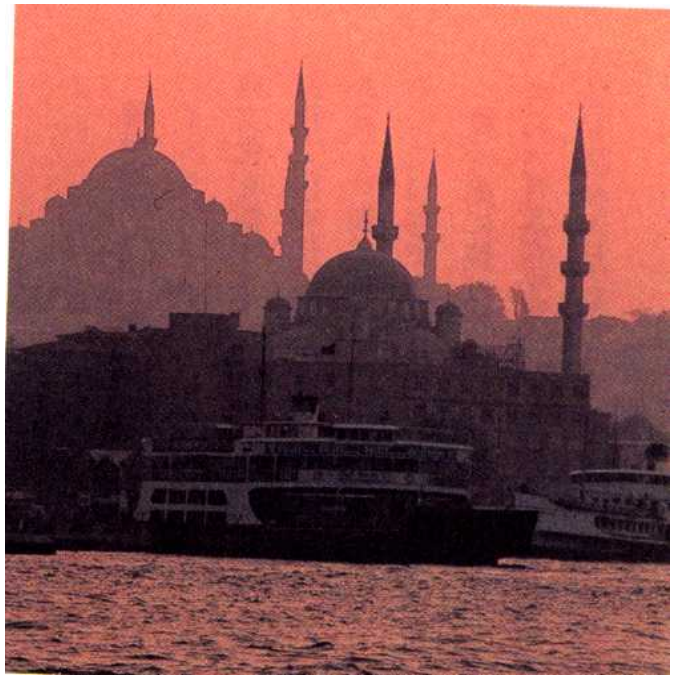
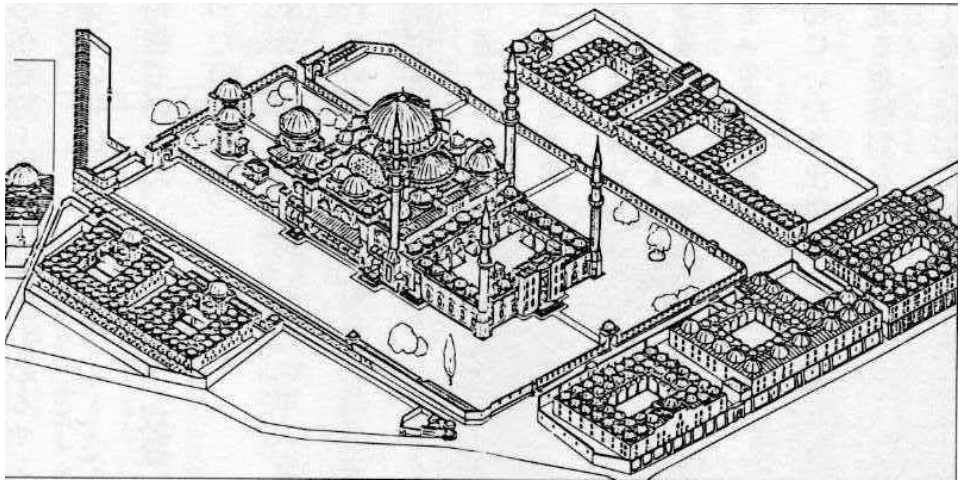
5.「市場」(バーザール、スーク)イスラムの経済空間

マディーナ

アレッポの「市」(マディーナ)



ワクフ複合体



スレイマニエ・モスク　モスクの周囲にはマドラサや病院、宿泊所、墓廟などが付属する。